

市の繁栄

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



市の風景

『模本 扇面写経下絵』竹内鳴鳳画 京都市立芸術大学芸術資料館蔵

私たちは、日常的に市場や商店街あるいは大型店舗へでかけ、生活用品を買い求める。時には直接的な購入を目的とせず、不特定の雑踏を求めてその不思議な空間に踏み入る場合も。美しく飾り付けた店がある。飲食店がある。銀行がある。遊技場がある。道路や歩道には栗売りがいる。布を敷いたアクセサリー売りがある。時として、デモ・祭礼・歩行者天国といった非日常的な空間ともなる。町は確かに魅力的だ。

この魅力的な京都の繁華街の歴史を遡れば平安京の市にたどり着く。従って、京都の経済的機能としての繁華街や市場は、政治都市平安京に在住する官人・貴族、都市市民による都市空間の自発的な活用にともなって、官営の東西市が

次第に変容・移動する過程で形成されていくのである。

古代の平安京にあっても、市は京内で最も人の集散する空間であり、十分に魅力的であったに違いない。商品を売る人々、見定める人々、喧騒、群衆に身を任せる人々、あるいは素敵な女性に懸想する人々などで賑わい、時にはそれら衆目を利用して刑の執行が行なわれたり布教宣伝活動の行なわれる場でもあった。

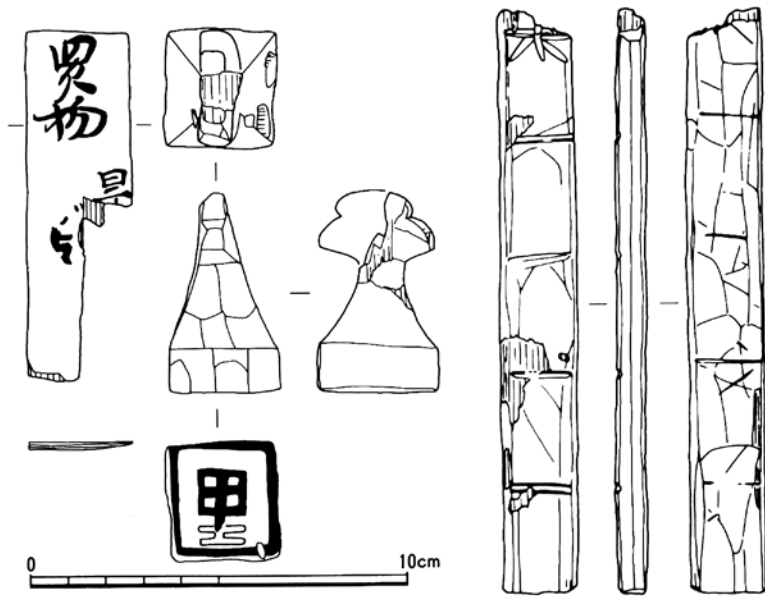
周知のように、平安京は律令官人体制の再編強化を遂行する目的で造営された、左右対称の厳格な平面構成を示す都城で、市も同様に左(東市)・右(西市)対称に設けられた。ところが一見合理的なこの都市の平面構成も、地形や水路、陸路などの交通網から見ると、

造営時から既に矛盾をはらんでいたようである。ともあれ、市は遷都を遡ること3箇月前には新京へ移され、市に籍を置いていた市人も新京に移った。

新京の東西市は、平安京の条坊で示せば、当初七条大路の北、東西堀川小路と東西大宮大路に挟まれた方2町の範囲を有していたが、後にはそれぞれの辺に接して外町を形成し始める。

実際、外町に該当する地点の調査では、板と杭を以って護岸を施した溝で整然と区画した遺構が検出されている。時代は遷都後半世紀を経た頃、場所は右京八条二坊八町の七条大路に面した箇所である。調査成果を検討するとこの八町の中央に小径が南北に貫き、道に沿って小規模な店が建ち並ぶという、まさに後世の絵画史料に見られる、活況を呈した店の情景の思い浮かぶ遺構なのである。この遺構や周辺の調査では、和同開珎をはじめとする皇朝十二銭、当時貴重品であった輸入陶磁器、緑釉陶器あるいは木簡、木製物差し、木製印など、市の繁栄を彷彿とさせる遺物が多数出土している。

今一つ市に関する興味深い資料がある。「買物」この墨で書かれた木札は、前述した八町のさらに南に隣接する二町の調査で出土した木簡の中の一つ、平安京が造営さ



出土木製品（木簡・印・物差し）

れて間もない、ようやく京が都市として胎動し始めた頃の遺物である。「買物」の下に何やら細かい文字が書かれている。買い求める商品名だろうか。しかし読めない。この木札を手渡された人物がある日いそいそと市へ買物にきた。

当時の市は法律で厳格に規定されていた。売買される販売品は『延喜式』では、東市51品・西市33品と定められていたが、1品につき複数の店が存在しただろうし、市には塩や穀物とともに、小は針から大は牛馬に至るまで売買されていたから相当の賑わいだったのだろう。東市は毎月15日以前、西市は16日以後に開催され、午の時（正午）をもって開かれ、日没前には閉められていたらしい。

買物は順調に進み、この札は用を終えたのだろうか。いや事のほかに人混みの中でこの札を大切に握りしめ、立ち並ぶ看板を確かめてあれこれ店の品々を捜し求めているのかもしれない。とにかくこの

札は外町のさらに南に捨てられた。この遺跡からは、他に「葛一口」「春米」「小麦」などと墨書された木簡、木杵や下駄、扇など大量の木製品、あるいは未製品の籬も出土しており、市の外縁部の状況や、市周辺での手工業生産を物語る考古資料としても見逃せない。

一方、東西市やその外縁部の卑湿な場所、溝・川・井戸からは夥しい量の祭祀具やあるいは呪符もみつまっている。表舞台としての市の賑わいの裏にはもう一つの舞台も用意されていたのだろうか。

同時に上記各遺構には重要な考古資料が眠っていることも忘れてはならない。それは土中に含まれる植物種実である。各地点の種実を調べていくと、当時の環境を復原する手懸りが得られるのである。各地点、各時代の資料を集積し研究することによって東西市の繁栄や消長も、他の考古資料との相互研究の中で解明されていくだろう。

さて、平安宮の東西に展開する

諸司厨町のうち、東方に所在する左衛門町と修理式町は、当初の東西市と同規模の方2町を有した官衙町で、雑役に当たる衛士・仕丁・舎人等多数の人々が集住する場所であった。この官衙町はもとより「凡そ京中の衛士、仕丁らの坊、商売することを得ず」とされていたが、多数の人々が地方から集まる場所である。必然的に物を商う人々が登場し、平安時代後期には「店家屋を比べ」る程の活況を呈していた。この官衙町の中央を南北に通る道路が町小路（今の新町通）と呼ばれ、この小路に交差する三条・四条・七条大路の各地域に新たな町（市場）が形成され、他の小路の中には、錦・綾・塩・油小路など、生活に密着した名称が定着していく。このような歴史の中で、政治的な意図によってようやく命脈を保っていた西市も、次いで東市の経済的機能も、左京域へ、鴨東へ、一条以北へと展開する都市とともに新しい地域へ受け継がれていく。そして、中世都市への変貌、秀吉の都市改造、東京への実質的な遷都を経て、現在の三条通や四条通、新京極通あるいは市街地に散在する商店街の、往時の東西市に勝るとも劣らぬ繁栄の中に私たちは今日もまた身を委ねているのである。

なお、西市の調査では、平安時代の繁栄の跡とともに鎌倉時代から近・現代に至る遺構が検出される。村落を念頭に置いたとしても案外歴史の表舞台から姿を消した西市の末裔が営々とその営みを継続していたのかもしれない。